

1 宗教とは何か1 - 1 : 古典的宗教哲学とその限界1 - 2 : 意味論から宗教論へ

< 宗教とは何か >

- ・ 実体形而上学とその本質論から、宗教の機能的規定へ
- ・ 意味論・言語論からのアプローチ
- ・ 社会システム論あるいは哲学的人間学
- ・ 宗教の広義と狭義の概念規定

1 - 3 : 究極的関心・深みの次元・自己超越性

< Paul Tillich の宗教論 1 >

(1) 究極的関心としての信仰

信仰の形式的定義、人格の全体性（関心）と人格性への相関性

Dynamics of Faith(1957), in:MW.5

Faith as Ultimate Concern, Faith as a Centered Act

Systematic theology. Vol.1(1951)

Two Formal Criteria of Every Theology

the first formal criterion of theology: *The object of theology is what concerns us ultimately.*

Only those propositions are theological which deal with their object in so far as it can become a matter of ultimate concern for us. (11-12)

our ultimate concern is that which determines our being or non-being. Only those statements are theological which deal with their object in so far as it can become a matter of being or non-being for us. This is the second formal criterion of theology. (14)

(2) 意味の形而上学 - 意味意識・意味行為 -

宗教哲学(1925)、形式（内容） - 内実、形式への志向性と内実への志向性

Religionsphilosophie (1925), in: MW.4

Die Ableitung des Wesensbegriffs der Religion

Die Sinnelemente und ihre Relationen

Jeder geistige Akt ist ein Sinnakt; Die geistige Wirklichkeit ist Sinnwirklichkeit. Darum ist die Lehre vom Aufbau der Sinnwirklichkeit, die Philosophie, Sinnprinzipienlehre und ihre erste Aufgabe eine Analyse des Sinnes selbst, eine Lehre von den Sinnelementen.(133)

In jedem Sinnbewusstsein ist ein Dreifaches enthalten: erstens das Bewusstsein des *Sinnzusammenhanges*, in dem jeder einzelne Sinn steht und ohne den er sinnlos wurde; zweitens das Bewusstsein um die Sinnhaftigkeit des Sinnzusammenhanges und damit jedes einzelnen Sinnes, d.h. das Bewusstsein um einen *unbedingten Sinn*, der in allem Einzelsinn gegenwärtig ist; drittens das Bewusstsein um eine Forderung, unter der jeder Einzelsinn steht, den unbedingten

Sinn zu erfüllen.

die Besonderungen des Einselnsinns und aller Einzelzusammenhänge bis zu dem universalen Sinnzusammenhang *Sinnformen* nennen,

der unbedingte Sinn als *Sinngehalt* zu bezeichnen.

Die allgemeine Wesensbestimmung der Religion

Richtet sich das Bewusstsein auf die einzelnen Sinnformen und ihre Einheit, so haben wir es mit *Kultur* zu tun; richtet es sich auf den unbedingten Sinn, den Sinngehalt, so liegt *Religion* vor. *Religion ist Richtung das Unbedingte, Kultur ist Richtung auf die bedingte Formen und ihre Einheit*, (134)

Im kulturellen Akt ist das Religiöse also substantiell; im religiösen Akt das Kulturelle formell.
(135)

(3) 生の現象学と宗教

Systematic Theology. Vol.3

1 . 生の運動と自己超越性

The three functions of life under the dimension of spirit separate in order to become actual.
(95)

Religion was defined as the self-transcendence of life under the dimension of spirit. ... But because of the ambiguity of life, they are also profane; ... religion must first of all be considered as a quality of two other functions of the spirit and the not as an independent function. (96)

Out of this situation religion arises as a special function of the spirit. The self-transcendence of life under the dimension of spirit cannot become alive without finite realities which are transcended. (97)

Religion as the self-transcendence of life needs the religions and needs to deny them.(98)

2 . 生の次元論から深みの次元

(4) 広義と狭義の宗教概念

広義の宗教とは、人間存在に可能性として普遍的に内在する、意味世界の根拠付け機能の担い手を意味している。狭義の宗教とは、この広義の宗教が特定の宗教的象徴（象徴体系）を介し、特定の信仰対象への関わりとして具体化したものであり、歴史的な制度化された宗教はその典型である。この二つの宗教概念の区別とその関係づけのための理論構築には様々な可能性がある（ティリッヒでは、意味の形而上学と存在論的人間学、そして生の現象学）。

この議論はいかの観点に関わっている。

- 1 . 実体 - 機能 名詞的と形容詞的（デューイ）
- 2 . 具体性 - 抽象性・普遍性
- 3 . 現実からの - 可能性における 両義性
 実存と本質、非本来性と本来性
- 4 . 本質 - 現象 - 規範

5. 広義と狭義の「形而上学」「存在論」「本質概念」の区別
本質概念あるいは概念規定なしに学的議論は可能か

仮説性

経験科学としての仮説性は科学性の条件であることは宗教学的には了解できるとしても、しかし、規範学としての神学と同じ意味での仮説性が適応できるか？ そもそも神学はいかなる意味で「学」なのか？

2 近代世界と宗教 - なぜ宗教か -

2 - 1 : フォイエルバッハ問題

1. 現代キリスト教を規定する問いとしてのフォイエルバッハ問題
フォイエルバッハの宗教批判は避けて通れない
源泉は古代ギリシアの哲学的神話批判 マルクス、ニーチェ、フロイト、キルケゴール
人間が想像した神・神人同型論
2. フォイエルバッハの宗教批判の二つの前提
人間の類的本質の無限性 類的本質の外化 (= 疎外、投影)
3. 「宗教は動物に対する人間の本質的な区別に基づいている - 動物は宗教を持たない」
個体としての自分や他者の意識 + 類的存在としての人間 (人間性) の意識
4. 人間の本質あるいは類 (あるいはいわゆる人間性): 理性、意志、心情
5. 類としての理性そのもの (種あるいは類としての人類) の無限性
6. 人間は自らの活動を通して自己を自分自身から区別された客体として措定する (外化あるいは疎外) 「対象の意識は人間の自己意識であり」、「対象は人間のあらわな本質であり、人間の真実にして客観的な自我である」
7. ヘーゲルの意識論: 「主観的精神 客観的精神 絶対精神」
8. 知識社会学: 外化 (表現・創造) 客体化 (制度化・実体化) 内化 (社会化・自己同一性)
9. 「他者は私の汝であり……私の他なる自我である。それは私にとって対象化された人間、私の頭わにされた内面である。すなわち他者は自分自身を見る目である。私は他者においてはじめて人間性の意識をもつ。他者を通してはじめて、私は私が人間であることを経験し感じるのである」
10. 「宗教は無限者の意識である。したがって宗教は人間が自らの無限の本質についてもつ意識であり、かつそれ以外の何ものでも在り得ない」。「神の意識は人間の自己意識であり、神認識は人間の自己認識である」
11. 「神は人間の鏡である」、「神学の秘密は人間学である」
12. 宗教: 人間の本質を人間の外に存在する超越的なもの (= 神) として措定 偶像崇拜
「神を富ませるために、人間は貧しくならねばならない」、「神が主体的であればあるほど、人間はよりいっそう自分の主体性を疎外する」
13. 哲学の課題: このような神と人間の対立が類的本質としての人間と個人としての人間の対立であることを暴露することであり、人間から疎外された人間性を人間の側に取り

戻すことなのである

14. フォイエルバッハによって批判された神

人間の無限の類的本質が人間と対立するものとして人間の外に投影されたもの
人間は無限な自らの本体的人間性の実現を妨げられる、人間のエゴイスティックな幸福衝動の素朴な実体化

最高存在あるいは最高価値として措定された神（形而上学的存在者としての神）

バルト「フォイエルバッハの鋭い感覚は正しい」

人間の類的本質の無限性の根拠

「個別的には人間の力は制限されているが、結合されると無限の力となる。個々人の知は制限されているが、理性は制限されておらず、学も制限されていない。なぜなら、それは人類の共同行為だからである」

近代人の「信仰」（無限の進歩）＝楽観主義・ヒューマニズム

現代の宗教的神学的思想は人間の疎外の克服、人間の本来的可能性の実現についてどのように考え、どのように答えているのか

「投影のメカニズム＝人間の本性」ならば、フィクション機能の積極的意味こそが問われるべきである（ユートピア精神の意義）

フォイエルバッハの宗教批判 マルクス的な無神論的な宗教批判（非宗教的宗教批判）
キルケゴール的な有神論的な宗教批判（宗教的宗教批判）

2 - 2 : 現代神学とフォイエルバッハ

(1) フォイエルバッハの宗教批判の系譜

<マルクス>

人間社会に宗教が生じたのは単なる偶然ではない。宗教は欲求の疎外形態における実現（否定的な媒体）であり、人間の現実生活の一契機なのである。

- ・唯物史観：生産力と生産関係の矛盾の弁証法的展開
- ・上部構造と下部構造
- ・個人と共同体

宗教批判と政治社会批判とは密接に関連

「ドイツにとって宗教の批判は本質的にもう終わっている。そして、宗教の批判は、あらゆる批判の前提である。天上の批判は、こうして地上の批判にかわり、宗教の批判は法の批判に、神学の批判は政治の批判にかわる」（『ヘーゲル法哲学批判序説』）

- ・フォイエルバッハの議論の歴史的事実化

宗教は人間社会の歴史において必然的に生じたものであるが、その歴史的条件が変化するとき、必然的に終焉を迎えるはずである。

- ・積極的批判と自動的消滅待望
- ・宗教はアヘンである

宗教を不可欠の契機として含まないような現実世界の構築

共産主義社会：非疎外形態における欲求・類的本質の実現 これ自体がユートピアか？

無階級社会

自己止揚・自己否定の契機をマルクス主義は内部に組み込んでいるか？

<ヨハネ黙示論 2 1 章>

22 わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが神殿だからである。23 この都には、それを照らす太陽も月も、必要ではない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。

<フロイト>

芦名定道 「第1章 現代宗教学への招待」『科学時代を生きる宗教』北樹出版

1. 無意識の発見(?)の意義 cf. デカルト主義
2. フロイトの近代主義：心理現象の因果的見方・遡及的見方(アルケオロジー)
意識は無意識と連続的に、力動的につながっている
病・症状(結果) 無意識の抑圧(原因)
3. 心のモデル(局所論) 経済論(力学的エネルギー論) + 解釈学
力と意味
意識 / 前意識 / 無意識、自我 / エス / 超自我
4. 治療のためのモデル化
5. 神経症 抑圧理論
抑圧されても消滅しない 症状：無意識内容の代理形成、置換・圧縮
6. 夢：欲動 夢を生み出すエネルギー = 無意識の欲望 夢の生産・欲望の充足
検閲：圧縮・置換・形象化・二次的加工
7. エディプス・コンプレックスと性欲モデル
誘惑理論 誘惑は事実ではなく幻想の産物 エディプス・コンプレックス(三角関係)
文化秩序の形成(欲望の収斂)
8. 宗教起源論
宗教は人類の願望成就
9. 神は投影である / 宗教は幻想である(還元主義的解釈学)
・ 幼児期に形成された父親イメージの自然への投影
・ 集団的な強迫神経症としての宗教
10. 近代人の宗教からの自立、啓蒙の勧め
11. 個体発生は系統発生を繰り返す(反復説) 心理学と民俗学：トーテミズム
12. フロイトの宗教論の問題点
科学主義(一種の信仰) 証明されない仮説への依存
狭義の宗教の意味では宗教者ではない、しかし広義の宗教の意味では、宗教的と言える。科学のイデオロギー性への反省が欠けている。
還元主義 想像力の積極的評価の困難さ
宗教現象の多様性を適切に扱えない
モデルの不当な一般化(人類学からの批判)

<文献>

1. フォイエルバッハ 『キリスト教の本質』(岩波文庫)
2. 松丸壽雄 「宗教批判の行方」(大峰編 『神と無』 ミネルヴァ書房)
3. パネンベルク 「無神論の諸類型とその神学的意義」(『組織神学の根本問題』
日本基督教団出版局)
4. レーヴィット 『ヘーゲルからニーチェへ』(岩波書店)
5. 半田秀男 『理性と認識衝動 - 初期フォイエルバッハ研究 - 』(溪水社)
6. 深井智朗 『アポロゲティークと終末論 近代におけるキリスト教批判とその諸問題』(北樹出版)
7. 都留重人 『マルクス』(講談社)
8. 津田雅夫 『マルクスの宗教批判』(柏書房)
9. フロイト 『トーテムとタブー』
『モーセと一神教』(著作集6, 8 日本教文化社)
10. ジェームズ 『宗教的経験の諸相』
『純粹経験の哲学』(岩波文庫)
11. リクール 『フロイトを読む』(新曜社)
12. 湯田 豊 『宗教とは何か』(北樹出版)
13. 島蘭進 / 西平直編 『宗教心理の探究』(東京大学出版会)
14. 松本 滋 『宗教心理学』(東京大学出版会)
15. 坂野 登 『意識とはなにか フロイト = ユング批判』(青木書店)
16. 太田久紀 『仏教の深層心理 迷いより悟りへ・唯識への招待』(有斐閣)
17. 佐藤 光 『市場経済のブラックホール 宗教経済学序説』(東洋経済新報社)

(2) キリスト教神学におけるフォイエルバッハ問題

<バルト>

1. バルト神学の基本的立場

1. 19世紀の近代社会に埋没したキリスト教とその神学(自由主義神学)に対する徹底的な批判とそれによるキリスト教の本来の在り方の取り戻し
神学は固有の方法と基礎の上に形成されねばならない。
cf. ハルナックとの論争
2. 神と人間との絶対的な質的差異、神の下における人間の危機
3. 宗教社会主義運動(スイス)、弁証法神学(危機神学、新正統主義、神の言の神学)の運動 - プルトマン、ブルナー、ゴーガルテンら -
4. 30年代以降: ナチス・ドイツ的キリスト者に対する教会闘争を指導・バルメン宣言
弁証法神学を超えて

2. 宗教批判への応答

4. 宗教と啓示との峻別

宗教: 神・救済へ向かおうとする人間的努力 = 自己救済の試み、不信仰としての宗教

3. バルト神学の評価

- (1)フォイエルバッハの宗教批判へのキリスト教神学からの応答の典型
- (2)近代のキリスト教とその神学の問題性を鋭く捉え、キリスト教と神学の固有性を再確認した。神学にはその固有の論理と方法がある。
- (3)フォイエルバッハの宗教批判に十分に答えたことになるのか
- (4)宗教は不信仰な人間的努力という評価は、キリスト教の自己批判としてはわかるとしても、他の諸宗教を一方的にいっしょくたんに扱うのは正当なやり方と言えるか。バルトの立場からは、他の宗教との対話などあり得ない。

< 文献 >

- 1.バルト 『カール・バルト著作集』『教会教義学』(新教出版社)
- 2.ボンヘッファー 『ボンヘッファー著作集』(新教出版社)
『共に生きる生活』(新教出版社)
- 3.大木英夫 『バルト』(講談社)
- 4.ユンゲル 『神の存在 バルト神学研究』(ヨルダン社)
- 5.大崎節郎 『カール・バルトのローマ書研究』『恩寵と類比 バルト神学の諸問題』(新教出版社)
- 6.トールンス 『バルト初期神学の展開』(新教出版社)
- 7.ブッシュ 『カール・バルトの生涯』(新教出版社)
- 8.森平太 『服従と抵抗への道 ボンヘッファーの生涯』(新教出版社)
- 9.雨宮栄一 『バルメン宣言研究』『ドイツ教会闘争の展開』『ドイツ教会闘争の挫折』
(日本基督教団出版局)
- 10.宮田光雄編 『ドイツ教会闘争の研究』(創文社)
- 11.宮田光雄 『平和のハトとリヴァイアサン』(岩波書店)

< ティリッヒ >

芦名定道 『ティリッヒと現代宗教論』(北樹出版) 144-155頁

< パネンベルク >

1. 先行世代の神学者の批判
バルトのフォイエルバッハ論への批判
2. 神の言葉の神学、実存主義的神学への批判 歴史の神学
黙示的終末論の再評価、自由主義神学の真理契機
3. 哲学や科学思想との対話する神学
4. パネンベルクのフォイエルバッハ論
ヘーゲル哲学への誤解という観点、哲学的人間学に基づく宗教理解
5. 人間存在と意味の問いから宗教へ
6. 有意味性と全体性、有意味な経験の可能条件
カントの無制約者の命題
「制約的なものが与えられているとき、制約的なものの全体が、それゆえ端的に無制約的なもののも与えられている」
7. 有意味性の構造

意味（意味連関内の構造）と指示の区別、部分と全体の循環

言語的な意味構造から生・経験の意味構造へ（ディルタイ・ハイデッガー）

8．意味の問いとしての宗教的問い - 「問いと答え」

現代の精神状況：意味空虚・意味喪失

9．意味連関（部分と全体、有限）における日常の意味の成立と、日常の意味地平自体の問いにおける根拠としての全体（無限）

超越あるいは全体：水平と垂直

10．有限な意味連関への志向性としての日常性、無限の意味根拠への志向性としての宗教無限の意味の地平は宗教においてのみ顕わに問われる

意味の問いは顕わに問われるとは限らない。

有意味性（全体）の度合い：日常性、科学、形而上学、宗教

11．宗教的諸伝統（狭義の宗教）

日常的な意味経験に含意される包括的な意味連関（個別の意味の根拠）への諸関係を統合する能力（答える能力）によって、その真価が問われる。

現代の世俗的文化に生きる多くの人間にとって、キリスト教の伝承してきた答えは、人間の世界現実の経験と生の問題との解釈機能を十分に満たしていない。

<文献>

1．パネンベルク『歴史としての神学』（聖学院大学出版会）

『キリスト論要綱』（新教出版社）

『組織神学の根本問題』『組織神学入門』（日本基督教団出版局）

『なぜ人間に倫理が必要か』『自然と神 自然の神学に向けて』（教文館）

『神の思想と人間に自由』『形而上学と神の思想』（法政大学出版会）

2．近藤勝彦『歴史の神学の行方 テイリッヒ、バルト、パネンベルク、ファン・リユラー』（教文館）

3．金子晴勇編『人間学 その歴史と射程』（創文社）

4．芦名定道『キリスト教思想と形而上学の問題』

『基督教学研究』（京都大学基督教学会）第24号、2004年、1-23頁

<ヒック>

John Hick, *An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, 1989

Yale University Press

12 Contemporary Non-Realist Religion

Feuerbach / Braithwaite, Randall / Phillips, Cupitt

<ポイント>

・投影理論にどのように答えるか。

宗教的実在の实在性をどのように理解し説明するかが、争点となる。

・宗教的実在論の問題へ

・宗教言語の問題へ、隠喩理論